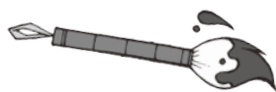


新・下野市風土記

節分と年越し



下野市教育委員会 文化財課

こしょうがつ 小正月

新暦の小正月である1月14・15日前後になると、スーパーやコンビニエンスストアなどで「〇〇神社祈禱済み」と記された節分用の豆や恵方巻販売の新聞チラシ、店頭広告が目につくようになります。

今、「新暦の～」と書きましたが、旧暦では小正月は立春後の春を迎える行事でした。そもそも小正月は、害鳥を追ひ払い、農作物の豊作を

祈念した行事で、「どんど焼き」や「左義長」などの大きな火によって、新しい春の禍を祓う行事でした。この祭りの時、地方によっては柿の木のところに鉈をもって行き「生るか生らぬか、生らぬと伐るぞ」と威嚇し、脇にいる者が木になり代わって「生ります、生ります」と答える行事などがあったようです。

旧暦と新暦

では、そもそも旧暦とは何でしょう？

簡単にまとめると、月の満ち欠けを基準として古代中国で用いられたのが太陰暦、太陽の一回帰を基準として古代エジプトで用いられたのが太陽暦と言われ、少し時代が下った中国では、太陰暦を基本としつつも太陽の運行にあわせて季節の変化を調整する太陰太陽暦が作られました。中国の暦が日本に伝えられたのは、隋との国交が行われた欽明天皇の時代の頃と考えられますが、正式には持統天皇4(690)年、下野薬師寺が創建された頃です。この頃から元嘉暦と儀鳳暦が前後して使用され、その後、大衍暦、五紀暦を経て、平安時代の貞観4(862)年から江戸時代までの長い間、宣明暦が用いられました。

江戸時代になると、宣明暦の誤差が著しいことから、渋川春海が貞享2(1685)年に貞享暦をつくりました。月の満ち欠けと太陽の運行との時間上には誤差が生じることから、月の満ち欠けの1周期が平均約29.5日なのに対して、宣明暦では1年を大の月(30日間)と少の月(29日間)が6か月ずつの12か月として調整しますが、そ

れだけでは1年が354日となってしまう、太陽の1回帰年である365日6時間弱に11日ほど足りなくなってしまう。そこで、農耕生活に合う二十四節気が採用され、太陽の1回帰年を立春、雨水、啓蟄、春分、夏至、秋分、冬至などの24等分に分割しました。この二十四節気は、季節を知るには都合が良いのですが月の満ち欠けとは合わないことから、雨水の日が含まれる月を1月、春分が含まれる月を2月としました。それでも誤差が生じるので、閏月を2～3年に一度設けることで日数を調整しています。

この二十四節気は、明治政府の政策により新暦に改暦され、明治5(1872)年12月3日は明治6(1873)年1月1日とされました。この暦はグレゴリオ暦(太陽暦)といわれます。この改暦により明治5(1872)年の12月は2日間しか存在しないことになり、当時の人たちは一か月ずれたような感覚の中で正月の用意をしたりしました。それからは、今に至るような季節感となりました。お盆の行事が7月と8月の地域があるのも、この改暦の頃からのようです。